

現代日本
文學全集

25

志

賀

直

哉

集



志賀直哉集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和三年六月二十五日印刷
昭和三年七月一日發行

現代日本文學全集 第二十四篇

著 者 志 賀 直 哉

發 行 者 山 本 美

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印 刷 者 杉 山 愛 二

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ二二

發 兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改 造 社

振替 東京 八 〇
電話 芝 (43)

四三二一一二
番番番番番番

「志賀直哉集」目次

巻頭寫眞(照影) 序 詞(筆蹟)

暗夜行路	或る朝	網走	荒絹	濁頭	老つた人	母の死と新しい母	正義の派	出づる夫の妹	速く	襖の	剃刀	祖母の爲に
三	一〇五	一〇六	一一	二四	三三	三六	四二	四四	四六	一六三	一六七	一七三

子供三題	鴿沼行	廿一代一面	クローディアスの日記	清兵衛と瓢箪	范の犯罪	冬の往來	黒犬	佐々木の場合	好人物の夫婦	赤西鱈太	流行行感冒	十一月三日午後の事	城崎にて	濠端の住ひ	小僧の神様
一六	一八	一七	二〇八	二七	三〇	三七	三四	三八	四三	四三	四三	四三	三七	三八	三八

焚火	雪の日	眞の	雨生蛙	轉生	大津順吉	或る男、其姉の死	和解	矢島柳堂	蘭齋後	ブラトニック・ラヴ	弟の歸京	山の形	過る去	山科の記憶	痴情	瑣事	晩秋	創作餘談	年譜
二九	二九七	三〇一	三〇四	三〇	三三	三四	三六	四三	四一	四四	四四	四七	四三	四六	四六	四七	四七	四八一	四八七

夢殿の救世観音を見てゐると、その
作者といふやうな事は全くぼんやり
ない。それは作者といふもののやう
全に遊離して存在となつてゐるやうで、
それと又格別な事である。文藝の
上で著しぬゝ人なはるゝでも出来る
ふとがあつた。私は勿論それの自分の
名をいふ冠せようとは思はないだらう。

昭和三年二月

直哉

暗 夜 行 路

序 詞

(主人公の追憶)

私が自分に祖父のある事を知つたのは、私の母が産後の病氣で死に、その後二月程経つて、不意に祖父が私の前に現れて來た、その時であつた。私の六歳の時であつた。

或る夕方、私は一人門の前で遊んでゐると、見知らぬ老人が其處へ來て立つた。眼の落ち窪んだ、狼脊の何んとなく見すばらしい老人だつた。私は何んといふ事なくそれに反感を持つた。

老人は笑顔を作つて何か私に話しかけようとした。然し私は一種の惡意から、それをばうらかして下を向いて了つた。釣上がつた口元、それを圍んだ深い皺、變に下品な印象を私は受けた。「早く行け」私は腹でさう思ひながら、尙意固地に下を向いてゐた。

然し老人は中々その場を立去らうとはしなかつた。私は妙に居堪らない氣持になつて來た。私は不意に立ち上つて門内へ駆け込んだ。其

時、
「オイ、お前は謙作かネ」と老人が後ろから云つた。

私はその言葉で突きのめされたやうに感じた。そして立止つた。振り返つた私は心では用心をしてゐたが、首はいつか音なく點頭いて了つた。

「お父さんは在宅かネ」と老人が訊いた。私は首を振つた。然し此うは手な物言ひが變に私を壓迫した。

老人は近寄つて來て、そして私の頭へ手をやり、

「大きくなつた」と云つた。

此老人が何者であるか、私には解らなかつた。然し或る不思議な本能で、それが近い肉身である事を私は既に感じてゐた。私は息苦しくなつて來た。

老人は其儘歸つて行つた。

二三日すると其老人は又やつて來た。其時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

更に十日程すると何故か私だけが其祖父の家に引きとられる事になつた。そして私は根岸のお行の松に近い或る横町の奥の小さい古家に引きとられて行つた。

其處には祖父の他にお婆といふ二十三歳の女が居た。

私の周囲の空氣は全く今までとは變つて居た。總てが貧乏臭く下品だつた。

他の同胞が皆自家に残つて居るのに自分だけが此下品な祖父に引きとられた事は子供ながらに私は面白くなかつた。然し不公平には幼児から慣らされてゐた。今に始まつた事でないだけ、何故かを他人に訊く氣も私には起らなかつた。然しかういふ風にして、こんな事が、これから生涯にも度々起るだらうと云ふ漠然とした豫感が私の氣持を淋しくした。それにつけても私は二ヶ月前に死んだ母を憶ひ、悲しい氣持になつた。

父は私に積極的につらく當る事はなかつたが、常に冷たかつた。が、この事には私は餘りに慣らされてゐた。それが私にとつて父子關係の經驗としての全體だつた。私は他の同胞の同じ經驗をそれに比較するさへ知らなかつた。それ故私はその事を然ら悲しくは感じなかつた。

つた。

母は何方かと云へば私には邪慥だつた。私は事々に叱られた。實際私はきかん坊で我儘でもあつた。が、同じ事が他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるやうな事がよくあつた。然し、それにもかゝはらず、私は心から母を慕ひ愛してゐた。

四つか五つか忘れた。が、兎も角秋の夕方の事だつた。私は人々が夕餉の交度で忙しく働いてゐる隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨てゝあつた梯子から誰れにも氣づかれずに一人母屋の屋根へ登つて行つた事がある。棟傳ひに鬼瓦の處まで行つて馬乗りになると、變に快活な氣分になつて、私は大きな聲で唱歌を唄つて居た。私としてはこんな高い處へのつたのは初めてだつた。普段下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。

西の空が美しく夕映えてゐる。鳥が忙しく飛んでゐる……

間もなく私は、一譚作。——譚作と下で母の呼んでゐるのに氣がついた。それは氣味の悪い程優しい調子だつた。

「あのネ、其處にちつとして居るのよ。動くのぢや、ありませんよ。今山本が行きますからネ。其處に音なしして居るのよ」

母の眼は少し釣上つて見えた。甚く優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の来るまでに降りて了はうと思つた。そして馬乗りの儘少し後じさつた。

「あゝっ！」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「譚作は音なしの事。お母さんの云ふ事をよくきくのネ」

私はちつと眼を放さずにゐる、變に鋭い母の視線から縛られたやうになつて、身動きが出来なくなつた。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下された。

案の定、私は母から烈しく打たれた。母は興奮から泣き出した。

母に死なれてから此記憶は急に明瞭して來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。何んといつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私は左う思ふ。

前後はわからない。が、其頃に違ひない。私は一人衆の間で寝ころんで居た。其處に父

が歸つて來た。父は黙つて、袂から菓子紙包みを出し、茶籠等の上に置いて出て行つた。私は寝た儘、じろく／＼とそれを見てゐた。

父が又入つて來た。そして今度は紙包みを戸棚の奥へ仕舞ひ込んで出て行つた。

私はむつとした。氣分が急に暗くなつた。間もなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持つて、次の間へ入つて來た。私には我儘な氣持が無闇と込み上げて來た。泣きたいやうな、怒りたいやうな氣持だつた。

「母様、お菓子」

「何を云ふんです」母は言下に叱つた。その少し前に私は其日のおやつを貰つてゐたのだ。

「何か。よう、何か」

母は應じなかつた。そして、疊んだ着物を簞笥へ仕舞つて出て行かうとした。

私は起き上つて、

「よう、何か——かういつて、母の前へ立ちふさがつた。母は黙つて私の頬をぐい／＼とねつた。私は怒つて其手をビシヤリと打つた。

「もう食べたぢや、ありませんか。何んです」母は私をにらんだ。

私は露骨に父の持つて歸つた菓子をせびり出した。

「いけません。そんな……」

「いや！——私は權利をでも主張するやうに頑固に首を振つた。何しろ、私は氣持がクシヤクシヤしてかなはなかつた。其菓子(かし)がそれ程に食ひたいのではない。兎も角、思ひ切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんな事でもなければ、どうにも氣持が變へられなくなつて居た。

母は私の手を振り拂つて、出て行かうとした。私は後(おそ)から不意に母の帯(おび)へ手をかけ、ぐいと力(ちから)一杯に引いた。母はよるけて障子(しょうじ)に觸(ふ)まつた。其障子がはづれた。

母は本氣で怒り出した。そして、私の手首を掴み、ぐんぐん戸棚の前へ引張つて行つた。母は片腕で私の頭を抱へて置いて、いやがる私の口へ其厚切りの羊羹(ようきやう)を無理に押し込んだ。食ひしばつてゐる味噌(みそ)汁(じゆ)の間から、羊羹が細い棒になつて入つて来るのを感じながら、私は度膽を破かれて、泣く事も出来なかつた。

興奮(こうふん)から母は急に泣き出した。少時(しやうじ)して私も烈しく泣き出した。

根岸(ねがし)の家では總てが自墮落(じだらく)だった。祖父は朝起きると揚子(やうし)をくはへて錢湯(せんたう)へ出かけた。そして歸ると其寢間着(ねまぎ)姿で朝餉(ちゆうかう)の膳(ぜん)に向つた。

来る客も變つた色々な種類の人間(にんげん)が來た。殊に花合戦(はなあせき)をする、その晩には妙な取合せの人々が集まつて來た。大學生、それから古道具屋、それから小説家(せうせつか)と、それから山上さんと皆が云つてゐる五十餘の一寸未亡人(いっすんみづらひ)らしい女などであつた。此女は其頃の醫者が持つたやうな小さい黒革の手さげ鞆(たも)を持つて來た。それには、きまつて澤山な小銭と、一揃ひの新しい花札(はなぱ)と太い金縁(きんぐし)の眼鏡(めがね)が入つて居たさうである。然し此女は未亡人(みづらひ)ではなく、其頃大學で歴史を教へて居た或る年寄つた教授(けうじゆ)の細君で、此女の甥が嘗てお榮と同棲して居た、その緣故で、良人にも隠れて好きな遊び事の爲めに來たのだと云ふことである。其甥と云ふ男は大酒飲みで、葉巻(えまき)のみで、そして骨まで浸み貫つた放蕩者(はうたうしや)で、たうとう其二三年前に殆ど明かな原因なしに自殺して了つたと云ふ事を私は二十年程してお榮から聞いた。

山上と云ふ女は十時頃には大概歸つて行つた。すると其頃になつて、東京者の癖に大阪辯(べん)ばかり使ふ若い寄席藝人(よせげいじん)がよく仲間へ入りに來た。

お榮は勝負(しょうぶ)へは入らなかつたが、祖父の勝敗(しょうぱい)には多少實際(じつざい)上の氣持(きもち)から、よく焦慮(せうろ)して口

出しをして居た。左う云ふ時、いつも下品な皮肉(ひにく)を云つて皆を笑はせるのは其寄席藝人(よせげいじん)であつた。

後年(こうご)私は、何故(なぜ)それ程困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたらうとよく考へた。月(つき)月(つき)困らぬだけの金は父から來てゐたのである。それなのに、祖父はがらくた道具屋(どうぐや)の競賣(けいばい)に家を貸して席料(せきりやう)を取つたりした。まうけづく以上、祖父の下品な趣味(しんみ)のやうにも思へた。

お榮は普段(ふだん)少しも美しい女ではなかつた。然し湯上(ゆがし)りに濃い化粧(けしょう)などすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。左う云ふ時、お榮は妙に浮き／＼とする事があつた。祖父と酒を飲むと、其頃の流行唄(はやりうた)を小聲(こゑ)で唄つたりした。そして、酔ふと不意に私を膝(ひざ)へ抱き上げて、力のある太い腕で、ちつと抱き締めたたりする事があつた。私は苦しいまゝに、何かしら氣の遠くなるやうな快感(かんぱん)を感じた。

私は祖父を仕舞(しま)ひまで好きになれなかつた。寧ろ嫌になつた。然しお榮は段々に好きになつて行つた。

か祭日かの事であつた。私は久しぶりで祖父に連れられて、本郷の父の家へ行つた。丁度兄達二人は書生と目黒の方へ遠足に行つて、咲子と云ふ未だ一年にならぬ赤兄とそして父だけが家に居た。

祖父と一緒に父の居間に挨拶に行くと、其日父は珍らしく機嫌がよかつた。父はいつたに愛想らしい事を私に云つた。父としてはそれは氣まぐれだつた。何か其日氣分のいい事があつたのかも知れない。然しそんな事は私には解らなかつた。私は何かしら惹かれるやうな心持で、祖父が茶の間へ引きかへしてからも、一人其處に残つてゐた。

「どうだ、謙作。一つ角力をとらうか」父は不意にこんな事を云ひ出した。私は恐らく顔一杯に嬉しさを現して喜んでに違ひない。そして首肯した。

「さあ、来い」父は坐つた儘、兩手を出して、かまへた。

私は飛び起き様に、それへ向つて力一ばい、ぶつかつて行つた。

「中々強いぞ」と父は軽くそれを突き返しながら云つた。私は頭を下げ、足を小刻みに踏んで、又ぶつかつて行つた。

私はもう有頂天になつた。自身がどれ程強いかを父に見せてやる氣だつた。實際角力に勝ちたいと云ふより、私の氣持では自分の強さを父に感服させたい方だつた。私は突き返される度にシヤニ、ムニにぶつかつて行つた。こんな事は父との關係では嘗てなかつた事だ。私は身體全體で嬉しがつた。そして、をどり上り、全身の力で立ち向かつた。然し父は中々私の爲めに負けては呉れなかつた。

「これなら、どうだ」かういつて父は力を入れて突き返した。力一ばいぶつかつて行つた所はずみ食つて、私は仰向け様に引つりかへつた。一寸息が止まる位背中で打つた。私は少しムキになつた。而して起きかへると、向勢込んで立ち向かつたが、其時私の眼に映つた父は今までの父とは、もう變つて感じられ

た。

「勝負はついたよ」父は興奮した妙な笑聲で云つた。

「未だだ」と私は云つた。

「よし。それなら降参と云ふまでやるか」

「これでもか」父はおさへて居る手で私の身體をゆす振つた。私は黙つて居た。

「よし。それならかうしてやる」父は私の帯を解いて、私の兩の手を後手に縛つて了つた。そしてその餘つた端で兩方の足首を縛り合せて了つた。私は動けなくなつた。

「降参と云つたら解いてやる」

私は全く親みを失つた冷たい眼で父の顔を見た。父は不意の烈しい運動から青味を帯びた一種殺氣立つた顔つきをして居た。そして父は利を其儘にして机の方に向いて了つた。

私は急に父が憎らしくなつた。息を切つて、深い呼吸をしてゐる、父の幅廣い肩が見るから憎々しくかつた。其内、それを見つめてゐた視線の焦點がぼやけて來ると、私はたうとう我慢しきれなくなつて、不意に烈しく泣き出した。

父は驚いて振り向いた。

「何んだ、泣かなくてもいい。解いて下さいと云へばいいぢやないか。馬鹿な奴だ」

解かれても、未だ私はなき止める事が出来なかつた。

「そんな事で泣く奴があるか。もうよし／＼。彼方へ行つて何かお菓子でも貰へ。さあ早く」かう云つて父は其處にころがつて居る私を立た

した。

私は餘りに明らかな惡意を持つた事が取柄がなくなつた。然し何處かに未だ父を信じない氣持が私には残つて居た。

祖父と女中とが入つて來た。父は具合惡さうな笑ひをしながら、説明した。祖父は誰れよりも殊更に聲高く笑ひ、そして私の頭を平手で軽く叩きながら「馬鹿だな」と云つた。

時任謙作の阪口に對する段々に廣もつて行つた不快も阪口の今度の小説で到頭結論に達したと思ふと、彼は腹立たしい中にも清々しい氣持になつた。そして彼は其讀み終つた雜誌を枕元へ置くのも穢らはしいやうな心持で、夜着の裾の方へ地つて電氣を消した。三時近かつた。

彼は矢張り興奮して居た。頭も身體も心は疲れてゐながら中々眠る事が出来なかつた。彼は頭を轉換さす爲めに何か氣樂な讀物を見ながら眠くなるのを待たうと考へた。が、左う云ふ本は大概お榮の部屋へ持つて行つてあつた。彼は一寸拘泥したが、拘泥するだけ變だとも思ひ返して、再び電氣をつけて二階を降りて行つた。襖の外で、

一寸本を貰ひに來ましたと聲をかけて、「原卜傳は戸棚ですか」と云つた。

お榮は電燈をつけた。

「床の間か、茶箆の上ですよ。未だ起きてたの。」

一眠むれなくなつたんで、見ながら眠むるんで、

「明日と云つて其部屋を出た。」

「御機嫌よう」かういつて、お榮は謙作が襖を締めるのを待つてパチツと電燈を消した。

謙作は其氣樂な講談を讀みながら、朝露のやうな濕り氣を持つた雀の朝の快活な啼聲を戸外に聴いた。

翌日はどんより曇つた靜かな秋の日だ。午過ぎて一時頃、彼はお榮の聲で眼を覺ました。

「龍岡さんと阪口さん」

彼は返事をしなかつた。返事をするのが物憂くもあつた。が、それよりも今日阪口に會ふと云ふ事が未だはつきりしない彼の頭では甚くこ

いぐらかつた問題であつた。

「あちらへお通ししてよ。直ぐ起きて下さいよ。」かう云つて出て行くのを、

「阪口だけ斷つて下さい」と彼は云つた。

「何うして？」お榮は驚いたやうに振り返り、兩手を襖に掛けた儘、立つて居た。

「ぢやあ、よろしい。二人共通して置いて下さい。直ぐ行きます。」

謙作をそれ程に不愉快にした阪口の小説と云ふのは、或主人公が其家にゐる十五六の女中と關係して、その女に出來た赤兒を墮胎する事を

書いたものであつた。謙作はそれを多分事實だと思つた。そして其事實も彼には不愉快だつた

が、それをする主人公の氣持が如何にも不眞面目な腹を立てた。事實は不愉快でも、主人公の氣持に同情出來る場合は許せるが、阪口の

場合は書く動機態度總てが謙作には如何にも不眞面目に映つた。尙其上にそれに出て來る主人公の友達と云ふのはどうしても自分をモデル

にして居るとしか彼には考へられなかつた。其友達に對する主人公の氣持が彼を怒らした。

主人公は其女が餘りに子供らしく無邪氣な爲めに誰れからも疑はれないのを利用して、平氣で友達の前で其女をからかつたり、いぢめたり

する事を書いて居た。お人よしで、何も氣がつかずにゐる友達がそれを切りに心で同情して

居る。主人公は尙皮肉にそれを見抜きながら、多少苛々として、其女を泣かす事などが書いて

あつた。

謙作は其女中を實際嫌ひではなかつた。如何にも無邪氣で人がよきさうな點を可愛く思つた事もある。然し阪口がこれと唯の關係で居さうもない事は大概察して居た。それが阪口の小説では何も知らぬ友達が心密かに其女を戀してゐるやうに書いてあつた。そして主人公は腹に動すると起つて來る嘲笑を押しつけて、それを冷やかに傍觀して居る事が書いてあつた。主人公が他人の心を隅から隅まで見抜いたやうな、いやに得意らしい心理解剖をする、それが謙作をむかへさせた。

然しそれにしても何故今日訪ねて來たか。其雑誌が出てからも一週間になる。其間何か自分から烈しい手紙でも來さうに思ひながら、中來ない。其不安に却つて脅迫されて出て來たのではないかしら。それともつと性の悪い偽惡者根性から、太々しい面構へを自分に見せるつもりで來たのかも知れないと謙作は疑つた。そして若しかしたら手つ取り早く、面と向かつて思ひ切り云つてやつてもいいと考へた。謙作の考へは段々誇張されて行つた。彼は顔を洗ひながらこんな考へで興奮した。茶の間で着物を着かへて居ると、座敷の方か

ら二人のしてゐる話し聲が聴こえて來た。二人は如何にも呑氣な調子で話して居た。謙作は何んだか自分だけ鯁張つて居るやうな變な氣がした。皆が平氣で居る中に一人怒つてゐる自分が狐につままれたやうに馬鹿氣でも見えた。そして彼は一人不愉快を感じた。
「昨晩はおそかつたつて？」彼が座敷へ入ると龍岡が氣の毒したと云ふ氣持を現はして云つた。

「もう起きる頃だつたのだ」

阪口はお茶を出して置いた其日の新聞を見ながら何氣ない顔をして居た。謙作は阪口が今自分が想像してゐたやうな氣持で來たのではない事を知つた。例のだらしなさからず／＼と龍岡に誘はれて來たに違ひなかつた。それでも彼は、

「君達は何處で會つたんだ」と念の爲めに龍岡に訊いて見た。

「僕が連れ出したのさ」と龍岡は答へた。そして「此奴の今度の小説を見たかい」と龍岡は特に此奴と云ふ言葉で一面或る親みをも含んだ輕蔑の流し眼を阪口へ向けながら云つた。謙作は返事をしなかつた。
「いやな小説だ。それもいゝが、中に出て來る

氣の利かない友達をモデルにして書いてあるのだ。昨日見てすっかり腹を立て、今朝起きぬけに出掛けて、怒つてやつた所だ」
阪口は新聞から眼を放さずにや／＼笑つて居た。龍岡は一人云ひ續けた。

「大部分空想だと云ふが、怪しいものだ。阪口のやりさうな事だ」

阪口はこんなに云はれても別に不愉快な顔もしなかつた。彼の腹は解らなかつた。然し彼の行爲の上の趣味から云つて、こんなに云はれながら只にや／＼してゐる事は確かに彼自身氣に入つて居るに違ひなかつた。左う云ふ所に優越を彼は示さうとして居る。又一つは龍岡が全然異ふ仕事をしてゐる所からも、その餘裕を持つてゐるしなかつた。龍岡は其年工科大学を出て飛行機の發動機の研究の爲め近く佛蘭西へ行くつもりで居る。

「他人の氣持を見透したやうな書き振りが一番不愉快だと云つてやつたんだよ。たまには當る事もあるが、人間の氣持は直ぐ動いて居るから、次の瞬間にはもうそれを反省してゐるし、或る場合、同時に反對した二つの氣持を持つて居る事もある。所が阪口の書く物では主人公に都合のいい氣持だけが見られて、不都合な方には全

で色盲なんだ」

「もう解つたよ。何通繰返したつて同じ事だ」

阪口も一寸不快な顔をした。

「今朝から散々油をしぼつて居るんだよ」龍岡

は謙作の方を向いて多少神經的に笑つた。

「しつこい奴だ」と阪口が獨語のやうに云つた。

「えー」龍岡もむつとして云つた、「この位の事を云はれて君に腹を立つ資格はないよ。腹を立つなら、もつと幾らでも云ふよ。君はムト

かどの悪者がつて居るが、悪者としてちつともなつてないぢやないか。書いたものでは相當悪者らしいが、要するに安っぽい偽悪者だ。——

腹胎が何んだい」龍岡はつっぱなすやうに云つた。彼は今まで快活らしくはしてはゐたが其實阪口のにや／＼した態度に不愉快を感じてゐたらしかつた。そしてそれを破裂させた。龍岡は小柄な阪口に較べては倍もあるやうな大男でその上柔道が三段であつた。左う云ふ點からも

阪口はすつかり壓迫されて了つた。

謙作は先刻から阪口に對する自分の態度を如何決めていゝかわからないで居る内に龍岡がこんな風にやつて了つたので、その白けた一座をどうしていゝか分らなかつた。其儘三人は黙つ

て居た。

「船は決つたのかい？」少時して謙作が沈黙を破つた。

「十一月十二日の船にした」

「支度はもう出来たのかい」

「別に大した支度もないからネ。——それは左うと、浮世給を少し買つて行きたいと思ふんだが、何時か一緒に見に行つて貰へないかな。どうせ左う高い物は買へないが、向うで世話になる人の贈物にしようと思ふんだ」

「此方もよくは解らないが、何時でもいゝ。行かう。然し此頃は随分高くなつたらしいよ。前の相場を知つて居ると買ふ氣がしないさうだ。若しかすると巴里で買ふ方が安い物があるかも知れないよ」

「そいつは困るな。何か別の物にするかな」

「椋原の千代紙でも持つて行つちや、どうだい。生じつかな浮世給より子供のある家なんかは喜ぶだらう」

謙作は阪口の氣押されたやうな様子を見ると氣の毒な氣もしたが、あの作中の友達が龍岡の云ふやうに龍岡をモデルにしたものとは思へなかつた。成程書かれた場面は大概自分の知らぬ

場面であつた。けれども其性格は阪口の眼に映

つた自分をモデルにして居るとしか思はれなかつた。實際阪口が龍岡に左う云ふかどうかは分らないが、一場面は成程君との場面を借りた。然し性格がまるで異ふぢやないか」こんなことを云ひさうな氣が謙作にはした。謙作はこれは阪口の猾いやり方だと思つた。若し自分が性格だけは僕をモデルにしたに違ひないと掛合つて行けば、それは同時に自身の性格を其作中の下らない人物のそれに近いものと認めることになる。寧ろ書かれた場面が實際自分との間にある事ならば却つて怒りいゝ。然し性格だけを自分に取つたらうとは云ひにくかつた。それ程に下らない人物に書いてゐる。龍岡が怒れば君をあんな性格の人間とは誰が思ふものかと云ひ、自分が怒れば、君はあゝ云ふ性格の人間と自分で思つて居るのだねと云ひ兼ねない。此處に阪口の變な得意がありさうに思ふと謙作は尙腹が立つた。今の謙作は阪口に對しては極端に邪推深くなつてゐた。前に彼を信じて居ただけにこれを裏切られた今は、事々にかう云ふ邪推が浮ぶのであつた。殊に愛子との事以來、それは甚だ面白くない傾向だと知りつゝも、彼は

妙に他人が信じられなくなつた。今も前後から

の阪口に對する氣持を考へて、龍岡が彼自身だ

けがモデルにされたやうに怒つて居るのを見てさへ或る疑ひを持つのであつた。

龍岡には或る昔氣質がある。若しかしたら作中の友達が同時に自分をもモデルにして書かれてある事を承知の上で、故意と自身だけがモデルかのやうに云つて阪口をやつつけたのではあるまいかと諺作は思つた。龍岡は左うする事で一方阪口を慫し、他方で、二人の間を多少でも氣まづくなくして日本を去りたいと思つてゐるのではあるまいか。それでなければ阪口をわざわざ連れ出して来て、自分の前でこれ程にやつつけることが普段の彼の氣質としては少し不自然に考へられた。龍岡には短氣な性質もあつた。然し自分だけの問題に第三者のゐる前であれ程に露骨に云ふ彼とも思へなかつた。諺作には其處に何か彼の昔氣質から出たおほはくがありさうにも思はれた。

二

新開地のやうな泥濘路に下品な強い光がさして居る。兩側の家々からは鮮やかな、然し神經を疲らしてゐる者はその爲め吐氣を催すかも知れない程あくどい色の着物を着た女達が往來を通る男に叫びかけて居る。それは憐憫を乞ふやうにも、罵るやうにも聴きなされる叫聲であつた。

龍岡と諺作とはもうすつかり壓倒されて了つた。二人は竝んで往來の中程を眞直ぐに急ぎ足で歩いて居たが、それでも龍岡は小聲で、

「中々綺麗な女が居るネ など云つた。
其日三人が赤坂福吉町の諺作の家を出たのは四時頃だつた。氣不味い感情を脱け出せずにゐる阪口は直ぐ二人と別れたがつたが、龍岡は却彼を離さうとしなかつた。龍岡には此儘別れて了ふのは如何にも寢覺が悪いらしかつた。彼は自身が餘りに云ひ過ぎた事を多少悔いてもゐる風だつた。そして三人は龍岡の千代紙を買ふつきあひをして日本橋の方へ行つたのである。

本原店、或料理屋で食事をした。諺作は殆ど飲めない方だつたが、其處を出た時には他の二人はもう可成りに酔つてゐた。龍岡が突然、これから吉原見物に行きたいと云ひ出した。西洋へ行く前に見た事のない吉原を一度見て行きたいと云ふのだ。

「諺作、いんだらう? 只見物だけだ。彼は氣兼ねをしなから諺作を顧みた。諺作も未だ左う云ふ場所を知らなかつた。「うん、彼は不愛忌に生返事をしたが、心では可成りに拘泥した。

左う云ふ場所には決して足を踏み入れまいと云ふ程の氣はなかつた。何方かと云へば多少の興味もあつた。それ故今龍岡にそれを云はれると表には冷淡を粧ひながら、妙にドキリとした。

——諺作と龍岡は電信柱の多い仲の町まで出て、其處で遅れた阪口の来るのを待つて居た。阪口はさきも酔漢らしい様子をしながら、格子とすれすれに、時々何か女に串戯口をきゝながら歩いて居た。

「オイ、早く来ないか」と龍岡が聲をかけた。「空模様がか少し變になつて来た」

阪口は聴えない振りをして矢張りぶらぶらと歩いて居る。諺作は空を仰いで見た。黒い雲が建竝んだ大きな建物の上に重苦しく被ひかぶさつて居た。

「俺達はどう歸るよ。一緒に歸るかい? それとも別れるかい?」と龍岡が云つた。阪口は何か愚圖々々云つて居た。そして三人は其儘其通りを大門の方へ歩いた。

ポツリ／＼雨が落ちて来た。三人は可成り疲れて居た。結局其邊の茶屋で少し休んで行く事にした。筆太に色々々な屋號を書いた行燈を出した同じやうな家が兩側に軒を並べて居る。三人はいゝ加減に西縁と書いた、其一軒に入つた。

眉毛の薄い、膚せた四十餘の女將が寒さうに兩袖を胸の上で疊み合せ、店先きに立つて、雨の降り出した往來を眺めて居たが、

「どうぞ」と云つて、未だニスの香の高い洋風の段々から彼等を表二階の座敷へ導いた。新築の白つばい木地には白熱瓦斯のケバくしい強い光りが照り反して居た。そしてそれとは凡そ不調和に、文晁とした、汚れ切つた横物の山水が浅い置床に掛けてあつた。ニスの香の高い洋風の段々と云ひ、此不調和な生々しい座敷の様子と云ひ、芝居の仲の町とは大分趣の異つたものだと言作は思つた。彼は多少落ちつかない氣持で、柱に背を寄せかけて、ジーンと音でもして居さうな疲れ切つた膝から下を立膝にし、抱へて居た。

女將と入れ代つて眼の細い體の大きい、象のやうな印象を與へる女中が茶道具を持つて入つて來た。

「小稻と云ふ人は居るかい」物馴れた調子で阪口が訊いた。

「さあ。もう晩うゝんすから、有ればようゝんすが。お馴染なんですか」

「いゝえ」阪口はいやに濟まして答へた。

ものか、どうかを迷ふらしかつた。そして、「一寸見て参りませう」と降りて行つた。

謙作も龍岡も何かしらぎこちない氣持に捉へられて居た。龍岡はそれを拂ひのけるやうに食臺の上の烟草盆から紙巻きへ火を移すと、勢よく立ち上つて、障子を開け、一人縁へ出て行つた。彼が、がた／＼云はして其處の硝子戸を開けると、同時に雨の音、泥濘を急ぐ人の足音などが聽えて來た。

「いゝ恰好をして駆けて行く」彼は通りを見下ろしながら云つた。

女中が今云つた藝者の隣りと、代りを云つて來た事とを云ひに來た。

間もなく、其藝者が入つて來た。藝者は若かつた。そして變に不愛想にして居る三人を見ると、取りつき端がないやうに一吋赤い顔をした。藝者は長い綺麗な襟足を見せて、靜かに高いお辭儀をした。謙作は美しい女だと思つた。

そして、物馴れない自分達は仕方がないとしても、阪口までが何故いかに冷淡な顔をして居るのかしらと思つた。然し間もなく阪口は「何んて云ふの? とか「何家?」とか訊いた。登喜子と云ふ名であつた。

小鼻の聞いた、元氣のいゝ、然し餘り上品でない、名まで男の兒のやうな豊と云ふ雛妓が入つて來た。

登喜子は豊と一緒に次の間へ下ると、豊が大政を張る間、三味線を箱から出して、調子を合せた。

登喜子は寄せた春の高い女であつた。坐つて居ても何んとなく棒立ちのやうな感じがした。動作にも曲線的な所が少なかつた。其癖妙に輕快な矢張り女らしい感じがあつた。

豊の踊りが濟むと、阪口は、

「何か他の事をして遊ばう」と云つた。豊の踊りは如何にも下手だつたが、濟むのを待つて居たやうに直ぐこんな風に云はれたら流石に不愉快を感じるだらうと謙作は氣の毒に思つた。

所が豊は却つてそれを喜んだ。そして、直ぐ下へトランプを取りに行つた。

十一時過ぎて居た。謙作は硝子戸越しに戸外を眺めながら、

「どうするネ?」と云つた。

「左うだなあ」と龍岡も生返事をして一緒に戸外を眺めた。雨はひつきりなしの本降りになつて了つた。もう人通りも前程ではなかつた。一臺の自動車が雨の絲を其強い光りで銀色に照らしながら通り過ぎた。

有耶無耶に尻を落ちつける事になって、皆はトランプの二十一をした。

「どうかすると、石本の細君にそっくりだ」謙作は札を撒きながら、隣りの龍岡を顧みた。

「左う」龍岡は今更らしく登喜子の顔を見た。

豊と何か話して居た登喜子は自分の事を云はれたと氣附くと、負けん氣らしい眼を謙作に向けて、

「こちらは私の昔の岡惚れにそりやよく似て居らつしやるわ」と云ひ反した。謙作は一寸まごついて矢が欠けなかつた。そして一寸沈黙が來けると、登喜子は又軽く、

「それから、こちらネ」と阪口の方を向いて云つた。「私の本當の兄さんにとつくりだわ」

「公平が保てないぞ」と阪口が云つた。「あら、それは本當の話なのよ」と登喜子はそれでも少し顔を赧らめながら笑つて居た。

龍岡が大きな聲で、

「オイ。皆早く賭けろ」と云つた。

眼の細い女中も仲間入りをして、軍師拳の遊びをする時だつた。謙作は時々登喜子と手を握り合はさねばならなかつた。

「今度はこれだ」こんな事を云つて、肩と肩とを附けて背後で暗號の指を握る。そして敵方の

支度がおそかつたりすると、

「ちよいと、これでしたわネ」と登喜子は謙作の顔を覗き込むやうにして、同じ指を握り返した。

りした。そんな時、他の人の場合では感じない鋭敏さを以つて其握り方の強さを彼は計つた。

そして此方から向うを握る場合にも同じ鋭敏さで握り方が、それ以上何の意味をも現はさないやうに注意した。彼は登喜子が多少でも意味のある握り方をする事を恐れた。望みなげに恐れ

た。これは矛盾だつた。然しそれが彼の神經で、又行爲の上の趣味でもあつた。其癖彼は猶日、何かで登喜子の好意の證が見たかつた。

ニツケル渡しの遊びをする爲めに、石紙で三人づつに分かれた。龍岡と阪口と女中、それから謙作と登喜子、豊といふ風に組んだ。

親になる人が真中になつて、五錢の白銅を握つた拳を他の拳と重ねる。交る交る一方を上にして仕舞に其白銅が何方の手にあるか分らない所、片々づつ、兩側の子の握り拳に重ねる。そしてそれを移すとも移さぬとも見せて、

最後に皆握つた兩手を膝の上へ置く。敵方は見てゐて、白銅のないと思ふ手から開けさして行つて、其空の手を餘計取つた程勝になる、左

う云ふ遊びである。

今、まぶしい程の瓦斯の光りの下に謙作の組

の三人が並んで行儀よく手を膝の上に出して居た。豊は子供らしいふつくらしした小さい手を派手な友禪襦袢の上に並べて居た。登喜子は女として大きい方だが、形と皮膚の美しい手を矢張り左うして居る。黒い着物の上だけに一層それは美しく見えた。其間で一人、謙作だけが、

折目もなくなつた着物の上に大きい節くれ立つた、その上黒い毛の澤山に生えた手を節の上だけが白くなる位堅く握り締めて出して居た。

「こゝには大丈夫ないネ」と龍岡が登喜子の手を指して阪口を顧みた。

「こゝに渡つてるよ」かう云つて阪口は凝つと豊の顔を見た。豊は下眼使ひをして黙つて頷を突き出した。

「向うから、順に開けさして行かうか」と龍岡が云つた。阪口は氣合を入れて、

「その左。へえ、右と續け様に登喜子の兩方の手を開けさして、自身の指を二本折つた。そして、

「どうせ謙作にもないと思ふがネともう一度、組へ確かめて置いて、」へえ、其熊のやうな毛が生えた手を兩方」と云つた。豊は大きな聲を出して笑つた。謙作は黙つて武骨な空の手を膝の

上で開けた。そして不愉快を感じた。彼は先刻軍師拳の遊びを始めた時から自分の武骨な手に拘泥つて居た。或る不調和な感じが、それに平氣にならう、ならうと思ひながら却々退かなかつた。それを今、阪口が露骨に指摘した。勿論彼は指摘された事で不愉快を感じたが、それよりも、そんな事で自分に不愉快を與へようとした阪口の低級な底意に尙腹を立てた。

三時、四時になると戶外も静まつて来た。雨も小降りになつて、地面を突きながら廻る鐵棒の響が湧えて聴えた。

阪口の眼は引込んで、はつきりと二皮になつて居た。彼は何かしら苛々しながら肉體からも精神からも来る凋殘な氣持に自身を浸し盡くして却つてだらしく絶えず饒舌つて居た。

夜が明け始めた。疲れと酔ひとで、龍岡も阪口も、もう其處へ寝ころんでうとうとして居た。豊は縁へ出て、秋らしい静かな雨の中をぼつと歸つて行く人々をぼんやりと眺めて居た。騒ぎに着崩れた彼女の着物は裾襠がりの不様な恰好になつて居た。瓦斯の光りが段々に間が抜けて来た。食ひ残された食物の器とか、袋なしに轉がつて居る巻煙草とか、トランプとか、

基石とか、それらの散らかつて居る座敷の様子が如何にも何か一段落ついたと云ふ感じを與へた。

謙作も疲れて居た。彼は前日の疲不足からも可成り疲れて居たが、何かしら腹の底では興奮して居た。そして一人「席取り」の遊びに使つた座蒲團を積み重ねた上に腰掛けて居た。酒と塵埃で薄よれた顔をしながら、こんなにしてゐる自分達が甚く醜く不愉快に感ぜられた。彼は一刻も早く此場面から自由になつたかつた。

彼は自分の普段の氣分を根こそぎ何處かへ持つて行かれたやうな氣がした。そしてそれを取戻さうとでもするやうに下腹に力を入れて、自身の胸や肩のあたりを見廻したりした。

彼は不圖、兄の信行の事を思つた。彼は誰よりも此一人の兄に好意と親みを持つて居た。彼はこの兄を一寸思つただけでも幾らか日頃の氣分を取戻せた。

「もう起きたかしら」左う思つて時計を出して見た。六時半だつた。

彼は段々を下りて行つた。階下では奥の薄暗い倉庫敷の中で、觀世より持った女將がいそがしうに其狭い處でお百度を踏んで居た。突當りの燈明のあがつた神棚から丁度歸る所へ

彼が前を通ると女將は愛意よく、「お早うムいます」と、一寸頭を下げた。そして、彼が電話の場所を訊かうと思ふ内に、又くると奥を向いて歩いて行つて了つた。

彼は流し元に働いて居た女中に電話を訊いて、兄へ掛けた。未だ寝て居ると云ふ返事だつた。一寸失望したが、起こして貰ふ程でもないと思つて電話を斷つた。

豊はもう食臺に突伏して眠つて居た。その傍で登喜子が獨り低い爪弾きをして居た。戶外は段々に人通りが繁くなつた。謙作はそれらの人々と一緒に歸つて了ひたかつた。左うでなければ此二人の女に早く歸つて行つて貰ひたかつた。

龍岡も阪口も今は軽い肝をたて、眠つて居る。登喜子は階下から振巻を持つて来て二人に掛けると、お辭儀をして、それから豊を起した。豊は半分眼を眠つた儘お辭儀をしてふらふらと起つて行つた。

「お豊さん、これ」左う云つて登喜子は龍岡が持つて来た千代紙の太い紙包みを渡してやつた。豊は昨夜それを龍岡から貰つて居た。

九時頃漸く三人は無印の番傘を二本貰ひ受けて、しとくと降る秋雨の中へ出た。

謙作は午頃疲れ切つて自分の家へ歸つて来た。門を入らうとすると、彼が其の一週間程前から飼つて居る仔山羊が赤兒のやうな聲を出して啼いてゐた。彼は其儘裏へ廻つて、物置と並べで作つた小さい圍ひの處へ行つた。仔山羊は丁度子供が長ズボン穿いたやうな足を小刻みに踏みながら喜んだ。

「馬鹿々々」

仔山羊は小さい蹄を圍ひの金網へ掛けて出来るだけ延びあがつた。謙作は隣りから堀越しに落ちる黄色い櫻の葉が前日からの雨でビツタリ地面へくっついてゐるのを五六枚拾つて、中へ入つて行つた。仔山羊は細かい足どりで忙しく彼へ従いて廻つた。謙作が蹣跚むと仔山羊は直ぐ前へ来て、懷へ首を入れさうにする。

「ヤイ、馬鹿」

仔山羊は美味さうに其葉を食つた。採むやうに下唇だけを横に動かして居ると葉は段々と吸ひ込まれるやうに口へ入つて行つた。一つの葉が唇から隠れると謙作は又次の葉をやつた。仔山羊は立つた儘の姿勢で口だけを動かし、さも満足らしく食つてゐる。謙作はそれを見て居

る内に昨夜来自分から擦り抜けて行つた氣分を完全に取もどしたやうな氣がした。彼は一寸快活な氣分になつて、

「さあ、お仕舞ひだ」と云つて、兩の掌に仔山羊の小さい頭を挟んでぐいとお胸へ引き寄せた。仔山羊は吃驚して、一寸抵抗したが、直ぐされる儘に凝然として了つた。謙作は未だ生えて居ない角の處へ手をやつて見た。それでも其處が少し高くなつて居た。彼は二三日前近所の小犬が五月蠅くふざけ掛かつた時に仔山羊が不意に角もない頭を相手の横腹にぶつけた様子を憶ひ出した。

「まあ、謙さんなの？」お榮が勝手口から顔を出した。「聲がするから、誰れかと思つて……」

「おからはもうやりましたか？」

「由が今買ひに行きました」

茶の間へ来た。

「御飯は？」

「もう済みました」

「ぢやあ、コーヒー？ それともお茶ですか？」

「今は欲しくありません」

「昨晚は龍岡さんへ？」

「妙な處へ行きました。吉原の引手茶屋で夜明しをしました」

「へえ。阪口さんの御案内なの？」

謙作は前夜からの事を簡単に話した。そして、

「初めてあゝ云ふ處へ行つたんだけど、何んだかそんな氣がしなかつた」と云つた。

「初めてぢやあ、ありませんもの。お行の松に居た頃にお祖父さんと三人で行つた事がありまして。何んでもあれば國會が開けて、梅のつき出しのあつた時だつたかしら」

「そんな事はない。國會の開けた年なら、僕が三つか四つだもの」

「左う？ そんなら何時だらう。夜櫻かしら」

お榮は、夜櫻の頃の仁輪加の話をした。左う云はれると謙作にはそれを見たやうな記憶ががすかにあつた。

謙作は直ぐ二階に床をとつて貰つて寝た。

夕方彼が未だ眠つて居る所に兄の信行が訪ねて来た。玄關へ出て行くと大きい赤皮のボートフォリオを抱へた會社の歸途らしい信行が立つて居た。

「寝てたのか？」

「あゝ」

「何處か飯を食ひに出ないか」

「あゝ。然し一寸上がらない？」